ぶらばん！

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぶらばん！

【Ｎコード】
Ｎ０１６６Ｑ

【作者名】
潤

【あらすじ】
佐々木　千比絽はとある高校の吹奏楽部の部長でホルン奏者の渡辺　楓を気に入っていた。

「こら、
そこホルンちゃんとチューニングしたの？
音悪いわよ」

私は佐々木　千比絽。
この高校の吹奏楽の部長である。
実は私にはみんなに隠してることがある。

それは私は男の子より女の子が好き。
いわゆる百合ということ。

「千比絽先輩。
ちゃんとチューニングしましたよ」
先ほど注意した
ホルン奏者の渡辺　楓が返事をした。

実を言うと楓を私は気に入ってるのだ。
「じゃもういっかい♭B吹いてみて」
「はい！」

べー。
♭Bにしては高めの音だ。
「もうちょっと抜いて」
「はい！」

「そこの男子！

私語を話すならでてって！」

「千比絽せんぱーい、すこし抜きました！」
「じゃもういっかい♭B吹いてみて」

今度はちゃんとホルンの♭Bの音だった。

「楓、その音覚えておきなさい。
先生チューニング全員できました！
指揮どうぞ」
そういって私は私の座席について吹く用意をした。

そして先生はいった。
「はい。今日はアフリカンシンフォニーの最初から」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
合奏終了。
ミーティングも終わり楽器を片付け中、
「楓。最近どうしたの？」
「何がですか？」
「最近音が合奏の前高いわよ」
「最近高めの音の練習してるんで、
もしかしたらそれが関係してるかも知れません」
「そうなんだ。
それで、どこまで出せるようになったの？」
「もうすぐハイ♭Bが出そうです！」
「そう、頑張ってね！」
「ありがとうございます！」
「そうだ、
私の家防音設備あるから

今度の休みにでも来て練習する？」
「え、いいんですか？」
「もちろん、いいわよ」

ーーーーーーーーーーーーーーー
そして次の休み。

ピーンポーン。

楓がホルンをもって私の家にやって来た。
私は防音壁の練習場へと案内した。

「千比絽先輩！今日はお願いします！」
「うん、じゃ適当に音だしして」
「はい！」

そして私と楓は練習を始めた。

「楓。すこし力みすぎ。もっと力抜いて」
「はい！」

(うーん。Gすこし高いかな？)
「楓。ちょっとホルン貸して」
「え…」
「楓のGがすこし高いから私が吹いてみるわ」
「でも、千比絽先輩チューバですよね？」
「今はね。中学時代はホルンやってたの」
「ホントですか？」
「ホントよ。もっと教えてあげれるわよ」
「じゃあ、お願いします！」

そしてその日は休憩をはさんで約４時間くらい練習をした。

時間は６時を指していた。

「もうこんな時間ね。
楓。晩御飯食べていく？」

「いえいえ、
そこまでお世話になるわけにはいきませんよ。」

「そう、わかったわ。ならまた学校でね。」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

そして帰宅中、

（いや〜
今日の千比絽先輩カッコよかったなぁ！
チューバからホルンにパー変しないのかなー？
今度すすめてみようー！）

ーーーーーーーーーーーーーーーー

次の部活終了後。

「千比絽先輩。
いっそチューバからホルンにパー変しませんか？」

「私は今チューバが好きなの。
ホルンにパー変する気はないわ」

「そうですかー、残念です。
じゃあ今度また千比絽先輩の家で
いろいろと教えてください！」

「いいわよ」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

次の休みの日。

ピーンポーン。

楓が来て練習を始めた。

その日は2時間ほどの練習で終わった。

楓が帰ろうとした時、
「そーいうば楓は彼氏とかいる?」
「いませんねー。
千比絽先輩はどうなんですか?」
「私もいないわ。
……楓、
その…百合な人ってどう思う?」
「百合ですか?
いてもいいと思いますよ。
そういうのは個人の自由ですし」
「そう。
じゃあもし私が百合だと言えばどう思う?」
「…先輩がですか?
えっといいと思いますよ。
それに私、百合に興味ありますし!」
「…ならさ、私達付き合わない?」
「それはえっと告白ですよね?」
「うん。
…私前からあなたのこと可愛いなって思ってて、
とても気に入っていたの。
だからあのその、私じゃダメかな?」
「いいえ!そんなことありません!
私で良ければお願いします!」
ーーーーーーーーーーーーーー

それから私は楓と付き合い出した。
普段は今まで通り厳しい先輩であり、
二人きりのときはイチャイチャと。

休みの日はデートをしたり、
私の家で練習したり、
手を繋いだりキスをしたり、
あとそのゴニョゴニョ（照）

私はあの時楓に告白して良かったと思ってる。
あの時告白してなかったら、
私はこの思いを押し殺して
気持ちを伝えられないまま過ぎていってた。

まだ楓との関係は隠したままだけど、
いつか言える日が来ることを願い…
「千比絽せんぱーい！おいてきますよ～！」
「ちょっと、そんなに急いでも遊園地は逃げないわよ。」

そうして私と楓は遊園地に向けて足を進めた。
いつか堂々と付き合えることを願いながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0166q/

ぶらばん！

2011年1月13日04時10分発行